鶴の便り

夕鶴の里資料館報

平成26年1月20日
第　37号
発行　夕鶴の里

TEL　47-5800

武田正先生　ご逝去

武田正先生

平成五年から夕鶴の里特別研究員として活躍された、武田正先生が、昨年十二月三十一日(火)にご逝去されました。享年八十三歳でした。

　南陽に伝わる民話や文化の研究、継承にご尽力下さいました。この夕鶴の里館報でも、武田先生にご寄稿いただいた民話講座を毎月掲載しておりました。

　５月には夕鶴の里でお別れ会が予定されております。

謹んでお悔やみ申しあげます。

【武田正先生の足跡】

　昭和五年山形県上山市生まれ。昭和二十八年に山形大学文理学部を卒業後、県立高校教員として勤める。その後、山形大学講師、筑波大学教授、山形女子短期大学教授を経て、山形短期大学教授、東北文教大学短期大学部名誉教授・同民話研究センター顧問となる。

　平成五年の夕鶴の里開館にあたり資料館展示物の考証、民話会ゆうづるの発会に貢献。開館後夕鶴の里特別研究員として活躍。平成９年からは、南陽市文化財保護審議会委員も歴任。南陽市史民俗編の調査員として、多くの民話や民俗知識の調査研究にあたった。

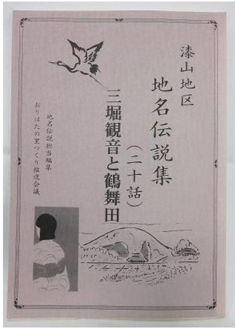
多くの著書も残されました。

新コーナー始まります！

　今月から、「民話会ゆうづる」の会員の方々をご紹介していきます。

　「民話会ゆうづる」は、地元の方々が中心となって平成三年に発会し、夕鶴の里が平成五年にオープンしてから、民話の口演を行っております。また、当館での口演のみではなく、県内外問わず様々なイベントへも精力的に参加し、多くの方に民話の語りを聴いていただき、活躍の場もどんどん広がっています。語り部養成講座へも力をいれ、次世代の語り手の育成、文化を伝えていく事を第一とし、活動しています。現在、会員の方は十五名いらっしゃいます。お一人ずつ、ご紹介していきます！

　また、今回ご紹介する民話会ゆうづる会長、多勢久美子さんから、『漆山地区 地名伝説集（二十話）三堀観音と鶴舞田』という、漆山地方に伝わる昔話を集めた、民話集をご紹介いただきました。「おりはたの里づくり推進会議」の皆さんによって作られ、平成十一年に地域の方々に配布されたものです。こちらから、民話を一話ずつご紹介させていただきます。



昔のあそび　蒸しパンつくり

　十一月二十四日(日)に、昔のあそびで「蒸しパン」を作りました。材料を混ぜた生地をカップに移すのがなかなか難しかったようです。蒸し上がってからの飾りつけは、全員が夢中になっていました！同じ材料でも、出来上がりは皆違い、それぞれの個性が出ていました。

～お願い～

　夕鶴の里駐車場への無断駐車は、除雪の妨げになりますのでご遠慮ください。駐車される方は、必ず夕鶴の里までご連絡ください。

TEL　４７－５８００

民話会ゆうづる 会員紹介

今回は、民話会ゆうづる会長の多勢久美子さんをご紹介します。多勢さんは会結成当初から参加しております。その経緯や、語りについて伺いました。

人との出会いを宝に

-民話会ゆうづる会員となったきっかけは？

多勢「はい、開館を前に初代会長の川合久男さんより入会を勧められました。」

-入会を決められたのには、民話に対する想いがあったのですか。

多勢「なして、なして、今みたいに昔話を聞く機会も無いがったし、めちゃこい時花咲か爺さんや、浦島太郎の話し聞いた位で、どがいな語りすんながも分かんねし、只孫でも生まっちゃら聞かせてやれるか？先ず折角だから勉強させてもらいもすがと思い、決心したなよっす！」

-語り部となられて良かった事は？

多勢「先ず第一に民話の世界の奥深さを武田正先生に学び又各地に語り出前することにより、その土地土地に伝統文化が有り、そこに生きる人達の生活が民話を通し、大切に伝承されてる事が分かり、良かったぜっす。」

-語り部をして一番嬉しかった事を一つあげるとしたら？

多勢「いやーいっぱいあって。先ずは沢山の方々との出会いだなぁっす！これは本当に昔話をする事により、全くお陰様で感謝です。」

-昔話とは多勢さんにとって何ですか？

多勢「これ程素晴らしい口承文学はないと思う。厳しい自然や恵まれない生活の中で未来に向って、明るく生きていく願いや智恵が込められてよ、口から口へと何十年何百年と語り継がれて来たんだべ。これこそ祖先が残してくれた宝物だべ。」

-語りを通して大切にしている事、物でも、教えてください。

多勢「『川合初代会長にもう一度来て語れ！と言われる…語り部になれ！』二十年語り続けてこられたのも武田先生の学は勿論のこと、皆様にお世話になったお陰です。語りする機会を与えて頂ける幸福に感謝し原点を忘れず、昔話を楽しむこと！」

-最後に、これから望む事は？

多勢「生涯学習の場として開館以来、私達語り部として役立って来たと思うし、又、市の観光施設として役割を果たしてると思う。この上は南陽市民の皆様方に是非ござってもらいもすて楽しい語りの集い場になれば、ね～どうぞ皆さん、ござっとごえや～す！」

多勢久美子さん

漆山地区 地名伝説集

〈鶴布山珍蔵寺〉

昔、むかし、おりはた川のほとり二井山に、金蔵と申す正直者が住んでいました。宮内の町に出た帰り道、池黒で若者が鶴一羽縛っていじめていました。金蔵はあわれに思い、有り金をはたいてその鶴を買い求め、縄を解き放してやりました。鶴はよろこんで大空を舞い舞い、どこかへ飛んでいきました。

やがてその夜、金蔵の家にすごくきれいな女が現れて、私をあなたの妻にしてください、何か働かせてくださいと、何遍断っても帰らないので、仕方なく置くことにしました。その女は織が上手で、織った布は非常に高く売れました。ある日のこと、女が「旦那様、私は恩返しに或る物を織り上げますから、七日の間、決して私の部屋を覗かないでください」といって、その日から離れにこもったきり、夜も昼も、コットンコットンという音がつづきました。七日目の夜の事、金蔵は待ち切れずに、一体何を織っているのかと忍び足で、離れに近寄り、窓のすき間から中を覗きました。とたんに金蔵はあまりの恐ろしさに、「あっ」と声を出しました。それもそのはず、布を織っているのは女でなくて、やせおとろえた一羽の鶴が、己の羽毛をむしり取っては織り、むしり取っては織り、すでにはだかになっているではありませんか。金蔵の叫び声に、織は止まり、その羽毛のない鶴は淋しく言いました。「旦那様、なぜ見ないで下さいと言った私の言葉を、お破りになったのですか。私は、ご覧の通り、人間ではありません。実はこの間、貴方に助けられた鶴でございます。私が今織っているのは、御恩返しに私の羽毛で作った〈おまんだら〉です。これが私の形見でございます。……さようなら」といって消えてなくなりました。

後、金蔵は感ずる所あって僧となりました。それで金蔵寺であった寺が、その宝物の名をとり、鶴布山珍蔵寺と改め称したと申します。また金蔵が助けたのは、つるはつるでも、つると申す京あたりの女織師で、それが尊いおまんだらを織ったという説もある。

（佐藤七右エ門『池黒付近の伝説私考より』）

地名伝説担当編集
おりはたの里づくり
推進会議

鶴布山珍蔵寺